

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★



Data

原作：R. L. スティーヴンソン
演出：山田和也
出演：鹿賀丈史/マルシア/茂森あゆみ

👁️👁️ みどころ

ブロードウェイミュージカル「ジキル&ハイド」の日本版。あぶらの乗り切った鹿賀丈史が、あまりにも有名な二重人格者の苦悩を美事に演じている。また、娼婦役のマルシアがはまり役で絶妙。公演の期間が短いのが残念。ロングランを望みたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<ミュージカルはいい！>

やはりミュージカルはいい。休憩時間を入れて2幕で約3時間。なんとも充実したリッチな時間と空間を堪能することができた。

ミュージカル『ジキル&ハイド』は、1990年に舞台化され、ブロードウェイをはじめアメリカ・ヨーロッパの諸都市で公演されて大ヒット。1500回を超えるロングランとなった作品だ。

そして今回の日本版ミュージカル『ジキル&ハイド』は、東宝・ホリプロ・フジテレビの3社が共同して作り上げ、2001年11月東京・日生劇場で初演された野心作だ。12月の名古屋公演を経て2002年1月5日から17日まで大阪のシアター・ドラマシティで公演された。なお、この『ジキル&ハイド』は、シアター・ドラマシティの誕生10周年記念の最初の演目になったとのこと。

『ジキル&ハイド』の正確なストーリー（原作）は知らなくとも、「1人の人間の中に潜む、善と悪の二重人格」というテーマは誰もが知っているもの。このような難しい、哲学的なテーマを、歌と踊りでいかに表現し、構成していくのか……。それがミュージカル制作の醍醐味だが、ストーリー展開、そして歌と踊りはまことに立派な出来。そして何より

も配役がびったりと決まっている。

<3つの魅力ーそしてマルシアは絶品>

第1に、ジキルとハイドの2役を当然の如く1人で演ずるのが鹿賀丈史。「レ・ミゼラブル」のジャン・バルジャン役を1987年の初演から14年間続けてきた実力派で、今、円熟期にある鹿賀がどうしてもやりたい役とだけあって、とにかく熱演。

その芝居の表現力と歌唱力は圧倒的な存在感を示している。そしてジキルとハイドの2役の転換も見事の一言。

次に、ジキル博士の婚約者で、最後までジキルを信頼してついていく、気丈で美しいお嬢様エマを演じるのは、「うたのお姉さん」を長年続け、「ダンゴ三兄弟」で大ブレイクした茂森あゆみ。

歌のうまさは折り紙つきなだけに、お嬢様役をそつなくこなしている。マルシアとの二重唱などもさすが。

第3に、この作品での配役の妙は、なんとと言っても娼婦ルーシーを演じるマルシア。結婚して子供を産んだ今もバラエティー番組などで引っ張りだこだが、彼女はもともと坂本冬美などと共に作曲家の故猪俣公章氏に師事し、1989年「ふりむけばヨコハマ」でデビューし、日本レコード大賞最優秀新人賞を獲得した歌唱力抜群の美人歌手。そのうえ、ブラジル・サンパウロ州出身で、スタイル抜群、踊りのセンス抜群というミュージカルにはうってつけの人材なのだ。そのマルシアがこの作品では魅力をいっぱい振りまいている。

マルシアの歌と踊りの才能、そしてボインの肉体（オペラグラスがついついマルシアの盛り上がった胸元と堂々と見せる美しい脚に集中してしまう）は、娼婦ルーシーの役柄にぴったりだ。

<メロディの美しさは絶品>

歌はメロディラインがわかりやすく、初めての曲ばかりでも自然に耳に入ってくる。二重唱や三重唱・四重唱の歌もじっくりと歌い上げるものが多く、胸を打つ。台詞回しの中に取り入れられた歌は下手をすると違和感があるものだが、この作品では役者の芝居や表情とうまくマッチしているためか、違和感がない。ダンスも、娼婦マルシアのダンスをはじめ、ピッタリと決まっている。

アメリカ・ヨーロッパでロングランを続けるだけの作品であることが十分理解できる。

<エンディングは・・・ダメですね>

ただ、難点が一つだけある。それはエンディングだ。

地獄の戦いの末に、自己の中のハイドを駆逐し、善良なジキル博士に戻り、エマとの幸せな結婚式が第2幕の最後の第7場。

ところが、この幸せの絶頂期に、再びハイドが現れ、ジキル博士はその制御が不可能になってしまう。そのためハイドは、なんとエマまで殺害しようとする。そこでジキルは親友のマターソン弁護士に「自分を殺してくれ。」「楽にさせてくれ。」と懇願する。ジキル博士の二重人格の秘密を知る唯一の親友マターソンは、やむなくジキルを射殺し、すべては終わる。

花嫁衣裳のエマに抱かれて静かに息を引き取るジキル博士。静寂の中での悲しいラストシーン。舞台が次第に暗くなり、ジ・エンド……。

このような静のラストシーンで終わるのも一興なのだろうが、これでは拍手のタイミングが難しい。案の定、ここがラストとわかりにくいためか、嵐のような拍手とはいかない。暗く静かな舞台から、急に音楽が鳴りはじめ、出演者の挨拶が始まると急に拍手が高まり、鳴り続けるという状況だ。

そして、スタンディング・オベーションも……。

だから、このラストシーンと出演者紹介は、もっともっと盛り上がるものに工夫をしてもらいたいと思う。

しかしとにかく、十分に満足できた3時間だった。日本でもロングラン公演となることを願わずにはいられない。

2002（平成14）年1月7日記